

小説部門：講評

審査委員：小説家 里見蘭

私が超然文学賞小説部門の外部審査委員を拝命して、早いもので四回目となりました。回を重ねるごとに、応募作の水準が底上げされているという、喜ばしい実感を抱いています。そして今回、この賞が新たなフェーズに移行したという気がしました。

佐藤文彦先生による講評にも書かれていましたが、応募作には回ごとのトレンドのようなものを観測することができます。今回は、前年度の講評を踏まえたうえでの「傾向と対策」によってそのような偏りが生じた可能性があるように思えます。

そのような傾向とは別に、応募作には毎年、同じジャンルにくくれそうな作品群があります。その代表的な一つは、私が、「等身大の主人公による、自己発見と成長もの」と呼ぶものです。

主人公は、作者と近い設定の高校生。多くは一人称で語られ、自分を取り巻く日常の現状に、何かネガティブな要素がある。このネガティブな要素は、たとえば、マスメディアでよく目にする社会学的な用語で定義できそうな「問題」だったりする。そうしたネガティブな要素を、主人公は、作中で中心となるある体験をすることで、新たな目で見直す（発見）ことができるようになり、ポジティブな方向へ成長する、というのがそうした作品に共通する構成です。

ここまで抽象化してしまうと、ほとんどの小説に共通するような構造にも思えてしまいますが、私が同じような作品群として認識する応募作には、佐藤先生が講評で示された「優等生的」という匂いが共通するのように感じています。ざっくり言ってしまうと、周囲の「良識的」な大人が、高校生はこんな風に自己発見をして、こんな風に前向きに成長してほしいな、と思えるような価値観にたどり着くことが物語のゴールとして設定されているという感じでしょうか。

誤解しないでほしいのですが、私はこうした作品を否定していません。このような傾向の作品でも優れている——テーマとキャラクター、構成等が高い水準でバランスよく結晶している——と思ったものは評価しています。結果、毎年少なくとも一作は入選作の候補として選んでいます。審査委員の視点からすると、こうした作品には、大学が主催し、高校生が応募する文学賞の候補作として、いい意味で安心して選ぶことができる、というアドバンテージもあることを認めます。

今回も、この作品群の中で一番優れていると評価した作品を、これは「鉄板」だろうと携えて審査委員会に臨んだのですが、一人の例外を除いて他の先生方の支持を得ることができず、選外となりました。

前置きが長くなりましたが、今回、「新たなフェーズに移行した」と感じたのは、こうしたことがあったからです。

応募者の目線に立って本賞の「傾向と対策」を考えた場合、「等身大の主人公による、

自己発見と成長もの」は、毎年一作は入選できる手堅いジャンルのように思っていたのですが、必ずしもそうではなくなった、というところに変化を感じたのです。

私が入選候補とした作品への他の審査委員の先生方のコメントには、「優等生ばい」「平凡」「探求授業のレポート」(のよう)といった言葉が見受けられました。

本賞は、入選すれば、由緒ある国立大学への特別入試の出願資格が与えられるという点で、まごうことなくアカデミックな文学賞です。高校生である応募者の皆さんや、指導される先生方の中には、「真面目」な作品に対してこのような評価が下されることもあると知って、びっくりされる方もいるかもしれません。

私としては、それは、本賞が回を重ねることで成熟した結果なのではないかと考えています。

私自身は、先ほど書いたように、小説として「よくできた(＝ウェルメイドな)」作品も評価する立場ですが、同時に、「文学」としての力を感じさせる作品も評価する者です。

では「文学」とは何でしょうか。

さまざまな定義があるでしょう。ここで私が個人的に考えるその定義の一つを示します。それは、「社会化されない個(人)をすくい上げる表現」というものです。

人間として生きていくうえで、われわれはどうしても自分たちを取り巻く社会に適合していかなければなりません。それはつまり、社会からの期待に応えるということです。しかし、その過程で、われわれ自身が持っている個々の人間性の全体あるいは一部を犠牲にしたり抑圧したりせざるを得ない、ということも起きます。そのときわれわれは、生きづらさを感じます。その生きづらさは、本来自分の一部であるものをもぎ取られる痛みにもたとえられるでしょう。

多くの人が、それは仕方のないものとして、我慢しながら、あるいはそんな痛みなどなかったことにして日々を過ごしています。文学というのは、その痛みをなかったことにせず、むしろそこにこそ人間にとって大切なものがあるのだと、すくい上げるもの——と私は考えます。

世界的な作家である村上春樹が、とある文学賞の受賞スピーチで、壁と卵があったら、自分は卵の側に立つ、というようなことを語ったのが以前に報道され、印象に残っています。この「壁」を社会、「卵」を個人、あるいは、個人の中にあって社会で抑圧されている部分、と言い換えることもできるのではないかと思います。

本賞に話を戻すと、社会で良識とされている「通念」に着地する「自己発見と成長」タイプの作品が、そのままでは必ずしも入選できるとは限らなくなったということです。同時に、過去、同じようにくることができそうな受賞作には、私が提示したような構成、構造に還元されない、収まりきらない何か突出したものがあつたからこそ、突破力を持っていたのだと改めて認識しました。

ただ、今回は、佐藤先生の前回の講評の「目新しいもの、これまでにないタイプの作品

を入りたい」という言葉に応えるかのように、意欲的な作品（江戸時代を舞台にした捕り物帖、巨大ロボットもの等）も応募されていたことにも言及しておきます。今回、ある程度の水準を満たした、さまざまな趣向の作品が集まったことも、本賞の成熟を示しているのではないかと思います。

以下、入選作について触れていきます。

佳作『わが部屋を巡る吟行』

明記はされていないが明治と思しき時代、「私」は、牛鍋屋で隣り合った他人と口論から殴り合いになり、警官に捕まって裁判官から決闘罪での有罪判決を下される。その罰は、「自宅の寝室に二週間幽閉する」というもの。

給仕役を兼ねた警官に見張られながら自宅寝室で幽閉生活を送る「私」は、寝室にある畳や家具や天井や小物をかつて旅の中で見た景色に見立てて、部屋の中で吟行をすることにする、という話。

まず、設定が非常にユニークです。あまりリアルではありませんが、現代とは隔たった、ある意味、さまざまな点で「大らかな」時代に舞台を据え、それをうまくチートとして使って、作者が描きたい世界を自由に楽しく描いています。

作者には俳句を詠む趣味があるのかもしれませんが、この設定によって自然に作中に俳句を採り入れることができるという仕組みも、クレバーだと思います。また、幽閉された生活という現実を、詩想することで超越しようとする試みや、「外へ出ようが、部屋にいようが、私のすることは変わらぬ。見て、感じて、勝手に意味を与え感動する。ただそれだけのことで、世界はいくらでも広がる」という着地点は、ストレートに文学的だと評価できるでしょう。

作中、「私」と父親とのエピソードが出てきます。ここは物語的なので、欲を言えば、さまざまな景勝地の記憶を呼び起こしながら、「私」の過去が、物語として立ち上がってくるような構成にできれば、短編小説としての面白さがさらに増したのではないかと個人的には思いました。

この作者が、本作以外にはどんな作品を書くのか、興味が湧きます。

佳作『ルーちゃん、朝起きられなくなる。』

「ルーちゃん」というのは、高校生の「私」の六歳年下である妹のあだ名。両親、姉妹、祖父母が同居する家族の中で、ルーちゃんが朝起きられなくなったという「事件」の顛末を描くお話。

文武両道、さまざまな習い事で才能を発揮する妹とは対照的に、真面目だけが取り柄だと自認する姉の「私」をはじめ、その怒声で家が揺れているのかと勘違いさせるほどパワフルな母や「おばあちゃん」等も、最初は、ルーちゃんがサボっているのかと思っていた。その原因がホルモンバランスの乱れだったとわかるまでを、コミカルに描いている。

この作品の最大の魅力は、作意というものを感じさせない点にあると思います。「私」は作者本人、ルーちゃんも、母も、「おばあちゃん」も、祖父も父も作者の家族そのまま、起きた出来事も事実なのではないか、と思える作風なのです。ちょっとドタバタしてぶつかり合いながらも、互いに、確かめ合うまでもない愛情で結びついている家族の日常を垣間見る楽しさ、それがこの作品の魅力だと思います。

「私」の飾らない、ときにお行儀の悪い語り口（「今からでも寝とけクソが。」とか）も、とても自然でチャーミングです。大学の入試に関わる文学賞だから、と、「よそいきの自分」や、「繊細で文学的な自分」を装うことを一切しない感じが、とても新鮮でした。人間というのは、当然ながら、「駄目」な部分もある。それもひっくるめて、むしろそれがあってこそ人間なのだ、ということをこの作者は、頭でっかちに声高に訴えるわけではなく、体感し、生きている。そう感じさせるところが、この、とくに技巧を感じさせない（いい意味で言っています）作品が持つ、最大の突破力でしょう。

他にどんな作品を書くのか、読んでみたいと思わせる作者です。

佳作『筏葛の馥郁よ』

主人公の「僕」は、ブーゲンビル紛争（私は知りませんでした。皆さんも、調べてみてください）において、革命軍と対立する、パプアニューギニア国防軍に所属する大尉。ブーゲンビル島に上陸しての軍事行動で、交戦中、自らが率いる小隊から孤立し、深い洞窟へと滑落する。そこで、革命軍の少年兵と対峙するが——という話。

素晴らしい小説です。

冒頭の悪夢に始まり、ほぼ全編戦闘シーンが展開されますが、豊かなディテールに支えられ、切れ味のよいレトリックに加速されて、終始緊迫感と迫真の臨場感が途切れません。

過去、現実起きた出来事を題材としているのですが、舞台となる島の景観や植生の描写によって、われわれのこの日常からかけ離れた、どこか異世界的でもある光景を読者の脳裏にありありと喚起する、とんでもない筆力を作者は持っています。

初めての実戦で、主人公は敵兵を殺さないという選択をする、というテーマも骨太で、それを頭でっかちなお題目ではなく、完成度の高い短編として結実させる構成力も備わっている。表記等に多少の瑕疵は見られますが、本当に素晴らしい作者であり作品だと個人的には最高評価をつけました。

他にも高評価をつけた審査委員の先生は複数いたのですが、この作品を文集に載せることに強く反対される審査委員がいらしたため、このような評価となりました。主人公の父親の、戦争（第二次大戦）でのトラウマについてもっと掘り下げた方がよかったというご意見でした（この意見に賛同された審査委員の先生もいました）。

本作のテーマは明確に「反戦」なのですが、作者の作家としての力量ゆえ、戦闘シーンの描写があまりにも印象的で、むしろ逆のメッセージを受け取ってしまう読者がいること

を、アカデミアとしてのお立場から危惧されたのかもしれませんが。

この年齢でこれだけの作品を完成させられるのは、素晴らしい才能の証です。私としては、これから先もぜひ書き続けてほしい、いずれはプロとして世に出てほしい、と考えています。

優秀賞『人間』

人間として肝心な「ころ」を持たないがゆえ、「人間じゃない」と自認する「私」は、人間関係で孤立し、死ぬことを考えて、「自殺の名所」として知られる福井県東尋坊へ赴く。そこで、「人の心が分かりすぎ」るがゆえ、生きるのが「しんどく」なり、やはり自殺を考えて同じ場所へ来た少女と出会い——という話。

講評の前段でも触れましたが、生きづらさというのも、文学においては普遍的なテーマです。この賞でも毎年、社会への不適合感を抱えた主人公の一人語りによる作品が、一定数応募されています。

この作品のユニークなところは、そうした作品にありがちな深刻なタッチではなく、どこか突き放したような淡々とした語り口にあります。周囲の人々から孤立するくだりなど、もう少し膨らませたら小説として面白くなると思うのですが、その辺もあっさり片づけることで、逆に軽さとユーモアが醸し出されて、この作品の味になっていると思いますし、自ら「ころ」がないと思っている主人公の筆致としても自然です。

主人公に変化をもたらす存在として、やはり自殺を考えていたが、思いとどまる少女が登場します。このキャラクターも「リアリティ」はやや欠けているように思えますが、作品世界にはうまく溶け込んでいて、主人公とのやり取りも、あまり違和感なく読み進められます。その辺りは、作者の持つセンスだと思います。

この作品は、発見からポジティブな変化へと移行する、王道の構造を持っていますが、その過程での小物の使い方など、とても印象に残ります。そして、この、淡々とした筆致が、さほどドラマティックさはないものの、前向きな変化を感じさせる着地の読後感を、とても爽やかにしていると思いました。

優秀賞『翡翠が海に流れていく』

図書館司書の「梨花」は、勤めていた図書館が閉館することになり、職を離れる。その日、街の商店街の隅に、アンティーク調の小さな宝石店を見つけ、導かれるように入ってみる。すると、老店主から、店の売り物であるはずの、糸魚川翡翠をプレゼントされ——という話。

日常系ファンタジー、癒し系ライト文芸、としてくれそうな作品。石の持つ不思議な力と、その力を理解することができる人間にもたらされる救いを描いています。

似た系統の作品は他にもありましたが、本作が審査委員の支持を最も多く集めました。

日常の描写が地に足がついていて自然で、ファンタジー的な不思議な現象の描写も同じ

ようなトーンで書かれているため、読者が抵抗なく受け入れられるようになっています。

主人公、老店主、そして、石が擬人化された、ルクスとアルトのキャラクターも、好感が持てるような存在として立ち上がっています。

このような優しい作品世界の中で、主人公が、父親の不慮の死を受容する、という重いテーマが扱われていますが、そのプロセスも丁寧に描かれています。

ウェルメイドな作品で、作者には、多くの人に愛されるような世界観を構築する力があると思います。

ぜひ今後も書き続けてほしいと思います。

最優秀賞『ふたつの水位』

主人公の「わたし」（汐見風）は高校一年生。双子として生まれたが、兄は、七年前、心臓の病で亡くなった。その事実を受け入れられずにいる母のため、風は、亡くなった兄を真似て、本来の自分の声より低い声でふだんは生活している。だが、彼には、母が知らない秘密があった。三年前から、本来の自分の声で、インターネットで配信を行っていたのだ——という話。

素晴らしい作品です。

構造だけに着目すれば、この作品は、高校生である主人公が、ネガティブな要素を抱えて生きているものの、ある出来事を経験して発見をし、ポジティブに変化する——という王道路線です。不安定なアイデンティティの危機を抱える若者が、自己を確立するための一歩を踏み出す話、とも言えるでしょう。

テーマも普遍的ですし、ストーリーそのものも、とくに新規性のあるものではありません（ここでは否定的な意味では使っていません。そもそも、こと文学の世界では「新しさ」が認められるハードルは非常に高い、というのが私の立場です）。本作を、同じような構造を持つ他の作品から抜きでたものになっている点は、作者の強靱な文学的意志である、と私は評価しました。

本作における作者の文学的野心は、人間の機微を、「深さ」「浅さ」「軽さ」「重さ」「速さ」「遅さ」といった物差しだけで描ききってみせる、というものだろうと私は推測します。そしてそのことに作者は見事に成功している、と私は考えます。

同じ内容を描くのも、ありきたりの表現を封じて、あえて違和感を抱かせるような言葉を用いる。そうすることで、われわれが日頃知っていると思っている当たり前の出来事が、まったく違って見えるという効果が生まれます。

文学の用語では、これを「異化」と呼んだりします（異化を使った作品にはもっと前衛的なものが多いですが、この作品はそちらには舵を切っていません。それは正解だと思います）。短編とはいえ、全編を通じてこの異化に全振りするということは、水泳で、ずっと潜水を続けるような感じではないでしょうか。野心と意志がなければできない試みです。

そして、作者に豊かな言語センスと、人間心理への深い理解があったため、高い水準の作品として結晶しました。シンボルとして使われている「水」のイメージも、統一感を持って、効果的に作品に織り込まれていて、見事です。

作者が一言一句をおろそかにせず、推敲を重ねて原稿を彫琢したことは、他の作品と比べても、体裁の上でほとんど瑕疵らしい瑕疵がないというところにもうかがえます。

作者は、とても地力の高い、文学志向の書き手であると思います。ぜひ今後も書き続け、さらに才能を開花させていっていただきたいと思います。